
零中隊所属 特攻野郎共

spas12K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零中隊所属 特攻野郎共

【Nコード】

N3480Z

【作者名】

spaces12K

【あらすじ】

警察直属ではあるがその存在を秘匿している組織。それに所属している人間と武偵の人間とのお話です。

行くぜ野郎ども！！（前書き）

文句だけのご勘弁を！！
異常です。

以上です。

行くぜ野郎ども！！

「めんどい任務やでこれはあゝ」

高速で移動するヘリの中、伸びをしつつ間抜けな声を出す。

「そうですね」

帰ってきたのは、これまた気が抜けた声。

「ルチアは相変わらず冷たいなあ」

「そうですね？」

いつもと変わらないんびりな少女ルチアは自分の武器を点検していた。

ZB26チェコの傑作軽機関銃だ。

腰にはVZ61スコピオン短機関銃、CZ75拳銃。

「お前、ほんまにチェコの銃が好きだな」

「ええ」

白長髪の髪を揺らして肯定するだけだった。

つてまあ、人のことは言えず自分の持っている銃も相当マニアックだ。

stgw510というスイスの全主力突撃銃だ。

アサルトライフルという部類に入るが、308ウィンチエスターよりも強力な実包を使う。

腰にはP210これもスイス製だ。

加えるところも滅茶苦茶高い。

「それと、任務中はコールサインで呼んでくださいですよ」

「はいよ、ヴェスパ4さん」

「それで、よろしいですよ」。健介さん

「お前もコールサインで呼べや！」

思わず突っ込む。

「あい・さゝ、なのですよ」

適当な返事が返ってくる。

固い椅子にもたれて時計を見る。

「そろそろ時間やな」

「ですね」

その折だった。

「ヴェスパ3、4降下用意」

ヘリの機長が告げる。

「了解や」「了解ですよ」

その言葉を合図に、機体足部のハッチが開く。

そのまま飛び降りる。

続いてルチアも飛び降りる。

数十メートルの距離を慣性を受けて落ちながら目的の建物に着地する。

衝撃でコンクリが割れて屋上に大きなひびが入る。

「毎度すごい襲撃の仕方やな」

「ですね」

屋上の扉を探して素手でぶち破る。

「さあ、やりまっか」

「了解だ」

二人それぞれ別々に移動する。

目の前のドアを開けると、黒スーツ姿の厳つい男が数人いた。

「誰や。どこの奴や!？」

そう叫んだ男の体が穴だらけになる。

そのまま横なぎに7・5 x 55 mm のフルサイズカートリッジが吐き出される。

後ろの壁まで穴だらけにして男が全員倒れていた。

「相変わらず、この銃は強いなあ。惚れ直すわ」

そう呟いて、どんどん突き進んでいく。

次々と弾倉を取り換えて、銃撃の手を緩めない。

敵がいると思えば壁の後ろにしようが問答無用で撃ち殺していく。

前に十階建ての建物の三階まで進んだところで奇妙な者を見つける。

「あちゃあ、やなもん見つけてもた」

健介が見つけたのは傷だらけの少女だった。

「お、まだ生きとるな」

傷だらけで周囲に血が飛び散っていたが、どれも死に至る傷ではない。

「本部か？ 女の子を一人助けたんや、回収へりに医者乗せといって」
「こちら本部、了解」

短いやり取りで通信が切れる。

「ヴェスパ4よりヴェスパ3へ、タゲは潰したよです」

「よーやった、ほな撤収しましょか」

「了解です」

その折、銃声が聞こえる。

「ヴェスパ3か？」

「私じゃないですね。武偵の子たちです」

「チっ、はようズラかるか」

あんまし面白くない連中が来たものだと思態つきながら、屋上まで戻る。

ルチアは先に到着していて、ヘリの誘導をしていた。

その数分後に撤収は完了して空を飛んでいた。

少女を拾ったという変わったことがあったが、まあ上出来だ。

行くぜ野郎ども!! (後書き)

まったくアリア関係なくでごめんなさい。
次回で登場です

高・校・編・入 命令！！

「はあ！ そんな絶対嫌やで！！」

「命令だ」

「ホワイ！ 何でそんな命令が回ってくんねん！？」

「機密だ」

髭を生やしたの中年男が機械的に言った。

「それにヴェスパ3、ホワイではなくフォワイだ」

「んなもん、訂正せんでええわ！」

「いや、重要だ」

男はあくまで毅然として言い張る。

「だ・か・ら！ なんで俺が高校しかもく武偵高へ編入するんだ」
机をバンバン叩きながら講義する。

「がんばれ。ヴェスパ4とヴェスパ7も一緒だ」

説明しておくヴェスパ1〜6はこの中隊での俺たち一人一人のサインだ。

ん？ ？？

「ストオオオツップ！ ヴェスパ7って誰や！ いつ増えてん！！？」

「昨日だ。そして昨日君が拾ってきた少女だ」

「ああ、あの子か？ それなら納得する……わけあるか！」

「うるさいなお前は、命令出す遂行しろ」

「うえええい」

全身全霊で願いたい——

目の前、天田中尉からの命令は絶対だ、従わなければならない。

「わかりやしたよ」

「素直でよい。そしてヴェスパ7だが君と同じ16歳。武器はロシア系だ」

「スペックと経歴は？」

「機密だ」

「？」

初めてのことだ、いままでヴェスパは大抵の経歴とスペックは教えてくれた。

だが、今回は情報無しときた。

「まいつか。ヴェスパ着任は理由と信頼込やからな」

「そういうことだ」

そうこうしていると、入り口の自動ドアが開く。

そこに亜麻色の小柄な少女が立っていた。

「ライカ・スクリャロフ女史だ」

「よろしく願いしま——へふっ」

入って来ようとして盛大にこける。

「見ての通りドジだが。うまくやってくれ以上」

話も終わったので、ライカと呼ばれる少女を連れて尉官室を出る。その後いろいろ身支度をした後、専用の車で遠くの東京を目指す。

さらば大阪——

車内から小さく敬礼する。

と言うのもこの専用車窓は特殊ガラスで光が通らない、よって外は見えない。

車内も運転席とは隔離されていて、座り方も向かい合う形だ。

これは、車内でも会議を行うためだ。

今は三人の人間が中央のテーブルに銃を広げている。

俺はstgw550、510突撃銃とP210拳銃そしてスペクトラ短機関銃。

ルチアはZB26チエコ軽機関銃、VZ61スコープオン短機関銃、CZ75拳銃。

さらにはZVI対物銃まで用意している。

ライカはAK74突撃銃、PP-2000 短機関銃、SVDS狙撃銃、スチエッキン自動拳銃。

V-94対物狙撃銃まで用意している。

ここまで、よく装備が整えられたと感心しつつ、この先のことに頭を抱えるのだった。

高・校・編・入 命令！！（後書き）

すいません、まだ何故か武偵が出ていません！！
しばらくお待ちを

武偵の実力を……

大阪へ東京間揺られること八時間。

新たな問題が、というか昨日からそうなのだが……

「えっと、金を貰えれば何でもする、極力人を殺すな、その他あ何だ？」

「いろいろあるみたいですよ」

中尉から渡された数枚の書類にライカは目を通す。

「むにむに、何でもいいですよ」

座席に横になって寝ていたルチアが投げやりに言う。

「お前は起きろ」

「康介さん私はもうそろそろ、飽きてきたです」

「お前、やっと俺の名前を正確に言うたな」

「あれ？ 私前回間違えましたか」

「ああ、『健介』って呼んだ」

「同じですよ、健介も康介も」

鼻から直すつもりはないらしい。

あつそう、と言って再び書類を読んでいく。

「うりゅ？ コウさんは高校が面倒なんですか？」

「面倒ってか武偵校っていうのがなあ」

康介が面倒くさがるのにも理由はある。

武偵というのは金さえ積み重ねれば何でもするという点。

成人にも満たない男女が武装している点。

紛いなりにも高い戦闘力や特殊能力を有している点。

そのほか幾つかの点からさまざまな組織・軍から目を付けられている。

例えば、シールズ、GIGN、空挺スペツナズ……

かくいう自分達、零中隊も警戒している。

だからこそ康介たち三人を編入させたのだ。

任務は情報収集そして行動の妨害。

楽な任務ではなくすぐに終わるものでもない。

小耳にした話では、最悪の場合は武力制圧の実行もあり得るとか。まあ、他の国の特殊部隊に攻め込まれるよりは幾分ましだろう。はあゝと深い溜め息をついて書類を机に頼る。

「うりやゝ、大変そうですね」

「だなあゝ」

笑っているが、こいつ等の御守りも頭が痛い。

何せ天然ゴーイングマイウェイの二人だ。

「どないしたもんかなゝ」

「何が大変なんですゝ」

またムクリと起き上ったルチアが呟く。

自分たち以外のヴェスパ達が言っても良いはずなのだか。

「普通の高校ではないが年相応の学生青春を送ってこい」

という中尉の言葉でこの三人に決まった。

カバンから板チョコを取り出してかじる。

そんな折、車が止まって扉が開く。

どうやら目的地に着いたようだった。

朝の眩い日差しの向こうに島が見える。

あそこに問題の武偵あるのだ。

新学期に合わせて編入したので三人全員が二年だ。

学部は都合上、強襲学部になっている。

各々が持つ銃器を詰めたバックパックや車輪付きのアタッシュケ

ースを転がす。

校門が見えてきたところで、無線機に通信が入る。

「こちらヴェスパ3、通信確認。オーバー」

「こちら本部。」

現在地点の近くに自転車に乗った学生もしくは武装された車両が見えるか？」

「否定。確認できません」

「ヴェスパ3に指令。近くの建物の屋上より周囲を詮索し報告せよ」

「了解」

「ヴェスパ4、7は予定通り学校へ登校させよ」

「了解」

通信が切れる。

二人の方に向きなおって通信内容を説明した。

「じゃあ私たちはそのまま登校します」

「うりゅー、頑張ってくださいコウさん」

「ライフルは持つてといてな」

「りゃじゃ！ です」

ピシッと敬礼してライカが荷物を運んでいく。

手伝う気が皆無のルチアは先に進んでいた。

「さてと……」

手近なマンションを見つけてその屋上まで移動する。

慣れた背中の縦長の黒いケースから一つの狙撃銃を取り出した。

SSG―3000、御多分に漏れずこれもスイスの銃器会社に係のある銃だ。

それを片手に双眼鏡で長方形の島を見渡す。

「あれやな？」

問題の人物はすぐに見つかった。

自分と同じ武偵校の制服姿の少年が猛烈な勢いで自転車を漕いでいる。

その後ろをセグウェイと呼ばれる乗り物が追いかけていた。

「ヴェスパ1から本部へ、対象を発見。指示を」

「可能なら救助せよ」

「了解。ですが何故ですか？」

「いくら武偵の生徒でも人であることに変わりはない。

それに武偵全員が悪とは限らない。見殺しにすることはない」

「承知」

通信を切つて狙撃銃を構える。

光学照準器を通して、その光景は鮮明に確認できた。

「あのセグウェイ、UZIくっ付けとるんか」

なまじ速い動きゆえに捉えることが難しい。

距離と風と対象の移動先を考えて見越し射撃を行う。

弾丸は移動するセグウェイの少し前の地面を挟った。

「ちよい後ろか……」

そう思ったとき、信じられない光景が飛び込んでくる。

建物の屋上から少女が落ちてきたのだ。

低抵高度のパラシュート展開。

さらに体を一回転させて手と足の位置が入れ替わる。

太ももの銃を取り出して発砲。

見事にセグウェイを破壊して少年を自転車から引きはがす。

直後に自転車は爆発した、少年が必死で逃げていた意味も分かる。

「二人は？」

二人の後を探すと爆発地点から近くの倉庫。

武偵校の運動場近くの建物に吹き飛ばされた痕跡がうかがえた。

「あれなら、助かったやろか？」

そう思った時、自転車の残骸の近くで数台のセグウェイが止まっ

ているのを見つける。

「しめた、止まっとる今なら」

状況を確認しているのか命令待ちなのか、止まっている目標に照

準を合わせる。

引き金が落ち、弾が発射さ、目標が飛び散る。

遊底を前後させ次の目標を破壊する。

五発目を打ち終えて弾薬を再装填した。

もう一度覗き込むと、目標は消えていて、二人が吹き飛ばされた

倉庫を囲んでいた。

「遠いな」

余り慣れていない狙撃であの距離は難しい。

そう考えたとき例の少年が入口から姿を現した。

躊躇無くUZIが火を噴いた――

そう見えた瞬間に全てのセグウェイが破壊されていた。

「何もんやねん」

言いつつ無線で本部へ通信を入れる。

「状況を知らせよヴェスパ3」

「少年は無事やし、敵も全て消滅したわ」

「なら良い。学校へ行け」

「了解、交信終了」

電源を落としてから薬莖を回収する。

時計を見ると始業式は既に終わっている時間だった。

「あちゃあ、初日から遅刻や」

幸先が悪いにもほどがあった。

この先のことを考えると本当に頭が痛くなる頃だった。

Let Shoot It ! ?

「うりゅう、大丈夫でしたか？」

「大丈夫と言っちゃ大丈夫だったんだが」

自分たちが不思議な目で見られているのに薄々感じる。

それもそうだ、編入して来たのだから自分たちの顔を知る者はいない。

学期始めだけれども二年だから自己紹介もない。

「まあ、暇にはならんと思うけどな、ライカ？」

「うりゅう、そうですね」

ちなみに後ろの席のルチアは机に突っ伏してもう寝ている。

俺の荷物は女子寮の彼女達の部屋に置いてあるらしい。

時間に余裕がなかったので直接来てしまった。

背中に背負ってる縦長のケースも目立ってしまっている。

ふと、隣の生徒も机に突っ伏しているのに気が付く。

寝ている、というよりも落ち込んでいる。

ずももも、と黒いオーラが彼を覆っていた。

(話しかけ辛いな、おい)

右隣はライカだ。

「君は狙撃科の人？」

顔立ちの整った雰囲気の良い男が話しかけてくる。

「いやちゃうで、強襲科や」

「へえ、そうなんだ。」

あ、僕は不知火 亮。君は？」

一瞬、関西弁に驚いたようだが特に気にしている様子はない。

「俺は豊和 康介や。よろしくな」

「こちらこそ、よろしく」

何気ない挨拶をしていると、活発そうな奴が付か付いてきた。

「俺は武藤 剛気な。よろしく！」

「お、おう。よろしくな」

武藤という男は横に突っ伏している男を指さす。

「そして、あいつが遠山 キンジ（とおやま キンジ）だ。女嫌いで根暗だがまあよろしく、してやってくれ」

「はあ」

「んで」

そういつて武藤が近づいてくる。

「お前の左の可愛い子、名前なんて言うの？」

コイツ、本当はそっちが目的か？

「うりゅ？ 私？」

ライカが自分を指さして首をかしげる。

「そうそう、名前なんて言うの？」

「ライカです。よろしくです」

「そうか、ライカちゃんかよろしく」

武藤はどことなく嬉しそうだ。

もう一話題しようとしたとき、担任が入ってきて皆席に戻る。右と左はまだ机に突っ伏している。

「みなさん、席についてください。」

今日は転校生が来ました、って三人はもう座ってますか」

康介とライカ、ルチアの方を見て担任が確認する。

全員こちらを見て、ああなるほど、納得する。

「そしてもう一人の転校生を紹介しまーす。

神崎・H・アリアさんです」

ガララと扉を開けて桃色のツインテール少女が入ってくる。

（あれは、さっきの女のか）

先ほどのことが思い出される。

「あたし、あいつの隣がいい！！」

入って来るなり、ビシッと指をさして自分の席を要求する。

その指の先には、その声に驚いて飛び起きた男。

遠山が目を丸くしていた。

「ほいじゃ、先生おれが変わります！」

と遠山の横の席、康介と反対側の武藤が手を挙げる。

そそくさと武藤は席を移動し、そこに神崎が歩いてくる。

「これ、返すわ」

そう言つて、遠山の机にドンツとベルトを置いた。

（ワオ、新学期早々お熱いな）

その光景に邪な想像をしてしまった。

「理子わかった！ これフラグバツキバキに立つてるよ！！」

「はあ？」

わけのわからない顔をする遠山。

「キー君ベルトしてない、そしてツインテールさんがそれを持ってきた。」

その謎はつまり！」

「「「つまり！？」「」」

全員が興味津々に聞く。

「キー君が彼女の前でベルトを脱ぐ何かをした！！」

「なるほど、つまりは恋愛中と」

不知火が納得したように呟く。

「なにいい！！」「影の薄い奴だと思つてたのに」「女嫌いじゃなかったのか！」「不潔……」

クラス中が騒ぎ立てる。

もう暴走状態だ、てか先生傍観してるし。

その騒ぎを断ち切る、鋭い銃声が幾度となく聞こえた。

「れ、恋愛なんてくだらない！ 全員覚えておきなさい！！」

そつという馬鹿なこという奴は、風穴開けるわよ！！！！」

開いた口がふさがらない。

（えらい、ビーバップなとこに来てもうたな）

と心から思ふのだった。

夕方、ライカとルチアの部屋から愛銃をとって男子寮に来ていた。

「俺の部屋は、ここか」

ようやく自分の部屋を見つける。

中隊に居た頃のように一人部屋でないことを残念だと思う。

誰かと相部屋らしい、カードキーを通して中に入る。

「邪魔すんで」

そう告げて玄関化で靴を脱ぐ。

「どうぞ」

と、気怠そうな聞いたことのある声が返ってくる。

「ああ、遠山が相部屋なんか」

「よろしく」

愛想がねえな、と内心思うが気にしない。

特別人が悪そうでもないの、あまりあれこれ言わないことにする。

事前に教えられた部屋の間取りと一緒にだった。

とりあえず物置に荷物を入れて、クローゼットに服を入れていく。個別に四つ縦に並んでいる。

「たくさん銃を持っているんだな？」

暫くこちらを見ていた遠山は話しかけてきた。

「ん、まあ俺の愛銃やな」

「強襲科でも普通拳銃なのに、すごいな」

「そうかあ。まあ半分趣味みたいなもんやけどな。ちなみに拳銃はこれや」

そういつて脇腹のホルスターからP210を抜いて見せる。

「俺はこれだ」

そいつて、銀色に塗装された銃を見せてくれる。ベレッタのM9だった。

「悪くない銃やな」

「そつちこそ、とても高い銃じゃないか」

「せやな」

思ったほど無愛想でもないみたいだ、冷静な人物という印象を受

ける。

「つと、銃の整備してええか？　ちよつと今日使った奴があつてな」

「構わないが……装備科に頼めばいいんじゃないか？」

銃を取り出しつつ呟く。

「自分の命を預ける相棒や、人に触らせるくらいなら死んだ方がええ」

一瞬、遠山は驚いた顔をした。

「まあ、人それぞれだよな」

「せやで」

そう答えて、今日使ったSSG 3000を取り出す。

解体はしないで、銃身内部をブラシ付きの棒で擦り、遊底の可動部に油を差し込む。

光学照準器のレンズを特殊な布で磨き、銃全体を拭いていく。

簡易メンテが終わった時にベルが鳴る。

「俺が出る」

そういつて、遠山が玄関へ向かっていった。

扉を開くと同時に

「遅い！　すぐ出なさいよ！！」

甲高い例のあの少女の声が聞こえてきた。

例の子、神崎はズカズカと部屋の中まで入って来るとテーブルを占拠した。

一瞬康介の狙撃銃を見てさらに上機嫌になった。

そしてこう高らかに宣言した。

「キンジ、あんた私の奴隷になりなさい！！」

「SMプレイか？」

スコーンと胡椒瓶がが飛んできて頭に直撃する。

「何すんねん！？」

「あああ、あんたこそ何言ってるのよ！！　次は風穴開けるわよ」
「思ってたこと言っただけやのに……」

聞こえないよう小声でばやく。

「神崎、どういうことだ説明してくれ」

困り顔の遠山が説明を要求した。

「そのアンタ、その狙撃銃の口径は・308ウィンチエスターやけど。」

それがどないしたん？」

何故か神崎は笑みを浮かべている。

「あんた朝のチャリジャックを見てたでしょ？」

あのセグウェイ付近に落ちていた弾丸を調べられたか……

時間が無かったので薬莢だけを回収した自身に悪態をつく。

「さあ、しらんな」

あくまで、白を切ることにする。

「バレバレね。まあいいわ、あんたもついでに奴隷になりなさい」

「まてまて、ついではないやろ」

「数は多くて困ることはないわ」

「俺の扱い雑いな、おい」

「ふう、それより客人に何か出しなさいよ」

会話が成り立たねえ。

「無視して話を進めるな！」

少し怒っているのか、遠山が声を荒げる。

「なんで、俺が奴隷なんだ」

「あたしには必要なのよ！ 強襲科に移って私の組むパーティーに入りなさい」

「強襲科が嫌で転科したんだ。そもそも俺は武偵をやめるつもりだぞ。」

「私には嫌いな言葉がある『無理』『疲れた』『めんどくさい』

この三つは人間の持つ可能性を押しとどめる良くない言葉。

それに長期戦も予想済み。うん、て言わないなら……」

「「それに？」」

「泊まっっていく！」

「「はあ!?!」」

「そして、出てけ!」

机を叩いて立ち上がる。

「「Why!!」」

「分からず屋はお仕置きよ!　そとで頭冷やして来なさい!」

強制的に殴りだされ、何が楽しいかは知らないが男二人コンビで時間をつぶす羽目になった。

大阪に帰ってえ!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480z/>

零中隊所属 特攻野郎共

2011年12月13日00時54分発行